

第二百八十一話 時既に遅し、世界最大最強の未完の空母「信濃」

今なお帝国海軍のシンボルと言え、戦艦「大和」であることに異論はなからう。その二番艦が「武蔵」である。三番艦として計画建造中に空母に改装されたのが重装甲空母「信濃」であり、世界最強最大になるはずだった。事実、米原潜エンター・プライズ就役(1961)までは世界最大の空母であった。(信濃の排水量6.8万トン、速度27.0ノット)

1 大和型超弩級戦艦建造計画の推進と計画変更

大和型戦艦の就役は、「大和」:1941/12/16、「武蔵」:1942/8/6である。武蔵就役に先立つミッドウェー海戦で、海軍は主力空母4隻を失った。真珠湾やマレー沖海戦の教訓もあり、米軍が両洋艦隊法により大型空母多数を建造していることも勘案して、空母機動部隊を再建するため、空母の保有数を増加(戦時急造空母)することを計画した。この時点で、船体進行率70%の110号艦(後の信濃)の取り扱いが問題となったが、航空母艦に設計変更し、1944年末を目指して就役させることが決定された。



2 「信濃」の戦艦から空母への改造

(1) 基本構想

基本構想について、艦政本部、軍令部、航空本部間の意見の相違があった。洋上の移動航空基地とも云うべき空母化、不沈空母化を目指す案もあったが、結局防御力も備えた攻撃用空母とすることとされた。

(2) 改造

1942/7末、設計変更が決定し、工事再開は9月、竣工は1945年2月末とされた。この時期、海軍は、損傷艦の修理を優先する旨の通達を発している。マリアナ沖海戦(1944/6/19~)で主力空母3隻を失い、信濃の竣工時期を1944/10半ばとするように命令した。工期を短縮し、急速改造としたのである。

工期の短縮、熟練工の不足もあって、脆弱性を孕んでいたのではと推測される。

1944/10/5注水浮揚時に事故も起こしている。原因は単純ミスであった。竣工したのは、1ヶ月遅れの11/19であった。

3 信濃の呉回航と沈没

(1) 呉回航決定

信濃は、第一航空戦隊に編入され、残された艦装や兵装搭載を行い、且つ横須賀空襲回避を狙っての呉回航が1944/11/24命令された。横須賀工廠の技術力低下を憂えたからだとも。呉回航に当たっては潜水艦を警戒して昼間沿岸案と空襲回避夜間外洋航行があったが、夜間外洋航行に決定された。

(2) 会敵、沈没

11/28、信濃は、護衛駆逐艦を従え、軍港を出港した。対潜警戒するも位置の特定できず、2040米海軍潜水艦「アーチャーフィッシュ」は信濃を発見し、浮上走行により信濃を追跡する夜間の追跡戦を行った。逃げる信濃の前方に占位した米潜水艦が魚雷を発射、4発命中した。本来であれば4発程度には堪えられる筈であったが、浸水が始まり電源も失われ、曳航作業も失敗し総員退艦発令、竣工から10日、出航から僅か22時間で沈没してしまったのである。

4 若干の観察

(1) 改造決断時期の適否は? 搭載すべき航空機は既に喪失していた。

(2) ダメージコントロールが機能しなかったのは、乗員の練度不足、熟練工不足による工事の数多の不備の存在 etc

(3) 「S事件調査委員会」が開催: 責任を問われるべき者多数につき誰しも処分受けず。

(了)